



^ 13
3201





大倭怪談全書

完

13
320/

門へ 13
3201
巻

大和怪談全書

大和怪談全書前編

序

あや—美とる人の奇とを
とさけ怪—とを消と—と語ある奇
やとふとも怪ふ—とあるを—
乞女のあやうくし—とあはれ
あはれ—とあはれ—とあはれ

三野
蔵澤慶

大和怪談

昭和九年
十月一日
購末

集るともど業とともまのいんま
下とまの筆とりて中ぬりて持も
三のちと申ぬる人あはれとてあは
十巻と寸法人の化生小値とと
まうと申すの日の夜りあまを

編の

穴貫

卷之目録

- 一 武江虎河の外満池と批源の日鯉の流と
- 一 見命の人孫進之事
- 一 播湯大坂河内と没殿の亡魂河内代小敷
- 一 事

卷之二

- 一 番所市旗市合田結七と江乳母鬼と老怪事
- 一 殿中湯吞取小使入作る作と化生小敷
- 一 吹上津殿と松下伊賀者猫候と討角
- 一 事

卷之三

大和怪談全書卷之一

武江虎御門外満池を桃源と日鯉を瀧と

貝分人界違事

人乃國小松といふ諸君を春三月の桃の花の咲
其所へ余多乃鯉魚集りてかの瀧へ入る人界違事
まことけ瀧のみならずり強してふあふ一喉乃鯉
いさよとあふまきを鯉に余多交交しくと流物ふ
瀧小者といひて落る鯉もありと又あふ小界持
一付を其體變して流るは是れ鯉なりと流物
小松といふあるを流小日出る流物にて見産

而の坊のりき者以故と云ふ方所創元と云ふ又而の坊
若年家成ぬ又而例所見人思其土城ともありし
軍の志まふ果^進と云るし當時就の天正
多の畏ひある凡就の悔もや事あまのいふ事
おたうの思成と云る事一と云身の事の事
を臨就と云る事一と云事家の説の怪話して大是物
七席と云せし良む物説をし由を分中を儀
と云ふありしと説や

揚陽大坂城内を渡りて焼中地代村話事

廿八日信房く物見しきる播磨姫路の天守(信房大守)

と云大坂城一の怪異あり人云く一まき事いふ
けりなる以外いふこと大坂城中の妖怪は多く
見ふの事多しありそ人の志^志る所あり云長十九
年元和冬夏五夜の物死多く記小元和夏降
秀利公を物く奪長多く討死し母堂^後後其
外一の美人は女焼死せり其形う淀殿ゆ^心せん
るせあく^菊深草のむ市南をこみ情りあり死
むよまのれを自れ其魂魄をとりてお小^小言
らをとありし一強のき物り人むしあり大坂若
衆の向^其信片勅書の抄者尻同心りるを

野をいしはらの葉を制し、松の上はふむのいれ、
割活せんとし、^婦誰人か海に降る、
さるるしく、^巻何より、^中り、^兵り、^さい、^女の、^いい、
の、^魂の、^あい、^をを、^らま、^しこ、^めの、^いの、^播ぬ、^いま、^の、^いい、
と、^けさ、^る風、^情の、^かさ、^もや、^印后、^ふや、^とあ、^もの、^印平、^はは、
中、^及き、^り比、^きふ、^波女、^性泪、^をそ、^とぬ、^もせ、^落じ、^いづ、
う、^しや、^のも、^いは、^を秀、^形の、^女流、^とい、^ふ女、^とせ、^え平、^の、
^軍小、^秀れ、^利を、^しあ、^ひ女、^流う、^しう、^を標、^をは、^城、
中、^ふは、^りし、^あは、^せの、^きよ、^りと、^ころ、^に女、^共の、^まま、^も、
ら、^いあ、^いん、^まい、^ゆふ、^まみ、^ゆか、^と余、^の、^還ふ、^あら、^まも、

その方へお夜一車有り、其お細い今、^物内、^青屋、
如昔小屋の、^花ふ、^大小、^の、^松下、^有き、^あの、^松の、^木は、^茂ん、
下ふこそ、^秀れ、^お守、^の時、^三層、^塔を、^少し、^さお、^登り、
今、^て埋、^めり、^花ふ、^え和、^の、^亂心、^後あ、^れ、^木外、^の、^松、
雜人入の、^場も、^あら、^う、^今、^若ふ、^屋の、^席ふ、^踏ら、^し、
と、^小迫、^きひ、^かる、^降を、^やも、^をま、^い、^捨り、^可と、^あま、^い、
あ、^まを、^おし、^む、^小堪、^らり、^あら、^其物、^を、^法律、^を、^地、
う、^法し、^松ひ、^く、^志執、^を、^休め、^及れ、^まや、^播ぬ、^と、^いひ、
捨、^て安、^らう、^ま、^清屋、[、]、^小笑、^も、^いひ、^ら、^所、^波や、^奇異、^の、
夢、^の、^あら、^う、^い、^あの、^人、^も、^せ、^れ、^し、^い、^まの、^い、^と、

あつたり 海の宮へいふは事 宛らあつたり 神の
こと 伴の場をせんとして 見給ふのふもかし
て 去る捲へ 器の形あるを 出づ 甲の錦の切
小包し 又有中いさすと 改てして 福の宮 大なるを
礼を 書して 見を 助ひ 神の 海内 法陣の 池へ けめ
のふくしと 建てる 神の 神を 建てる 流ひて 流
の 亡くも ことば 流ひたる 是を 冥に 其の 何を 奉
る事 事ある 是も 神の 勅を 奉り せめて 他を せむ
ぶら 旋やう づつ づつ 其の 流する 人 とも こと
さし

大和怪談全書巻之二

昔所古旗中合内流せは 江乳母鬼子と云怪事
乾坤陰陽の流し 事 萬物とす 天地 変化
の 道理 何ぞ 是を 通ぬ 是も 況や 人 乃の こと
と 夫 婦 命 命 あり 事 あり 是も あり 人 也 若 夫 小
ま こと あり して ぬ 人 胎 胎 せ ば 是 小 あり 事 あり
ある 事 あり して ぬ 人 胎 胎 せ ば 是 小 あり 事 あり
人 あり 今 勅 候 事 あり 事 あり 是 事 あり 是 事 あり
候 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり
不 志 の こと あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり

十郎半の子のりさくもていぬしやくく力重きく
まじく大人の子は邪の力を平す取しきると防の
見高きよと成りある時庭着法の有し不慮の
四入のり福もしき人福もし動しつるさくさく
将どより福の例ふ茶をさしひ居りしつるさく
はいとまき庭へりうはふ人のとまぬけひ一衆
はよふして物くし斤付りしつるさくの振も
今の保七もどろく折も未だ母もさくさくさく
今時今田の一人の書をもく居ましつるさくの
小將様として身り清りの外小將一白の居り
仲あるは法も是おの陰よりまのりしつるさくの
仲の睥睨し一白の人の境も血跡もさくさく
少くも是しつるさくの境も鬼形のもく
はく是か大急人の如しつるさくの境も
あしつるさくと命田の境もはくはくはく
心と重し信の境もつるさくはくはくはく
まじりしつるさくはくはくはくはく
英雄の腕の力向くはくはくはくはく
めく死もきり仲の死骸より後顔も角をしじ
をり先放ふはくはくはくはくはくはく

力もして言推ひと推ひひたるとありおましからぬ
今日御文を御覧の勅も一年の御裁取御作の御
しつと付ふとて決断人を料のちとして御裁多
とありしつと付ふの自然と意察して命もも
し者有るしちるのの恨も共入る事となる
さしと御裁の御内言としてありしものなるし
しつと御裁の當りし事ありとて其故命内言を
且那寺も御裁を信を致ししとてし事
実況わして御裁の御内言ももてし物候のま
小記し

依り御裁の御内言の御裁の御内言
元文の御裁の御内言の御裁の御内言
勅候ありし御裁の御内言の御裁の御内言
御裁の御内言の御裁の御内言の御裁の御内言
以て御裁の御内言の御裁の御内言の御裁の御内言
夫の御裁の御内言の御裁の御内言の御裁の御内言
其の御裁の御内言の御裁の御内言の御裁の御内言
御裁の御内言の御裁の御内言の御裁の御内言
不の御裁の御内言の御裁の御内言の御裁の御内言
元文二年の御裁の御内言の御裁の御内言の御裁の御内言

世中人能依之者法ある相帯の何某と云ある寐は時
精の過りて人々を夜とて地急并當新を云出し食
事して定むるも凌へし湯春玉の正就て能換湯が
とどじまうしこそ仕久間年當新を持て
湯春玉の部く相帯の何某は清書玉の正就して
片すかりる湯春玉の中口法持の
後坊を新玉の正就する大なる之を云ふ大なり
小唐の初年 随く湯をたすこせも清書玉を
自由のるや湯春玉の正就するもの有りて交を相勤
ふれとも夜中火を能換湯のこよぬ換ふし
て六丁の形を入るは休るを云ふ小側小人の正就仕久

間小十人者不が湯春玉の正就する湯を能換と罐よ
のぬいひも湯春玉の正就するもの有りて交を相勤
ふれとも夜中火を能換湯のこよぬ換ふし
て六丁の形を入るは休るを云ふ小側小人の正就仕久
黒髪を脱して小よると教をわして小よると
知りし事も法をより怪しきものありしは法をより
大の法をより法をより怪しきものありしは法をより
くし中をよりの件の首は忽し湯の燭をより
るもあつても法をより怪しきものありしは法をより
心不秋し其の法をより怪しきものありしは法をより
も法をより怪しきものありしは法をより

事にせよ。事 今頃からなる事

吹上り殿を招き伊賀守 物候を打留事

享保十九年 寅三月の事ありし 殿中より

吉宗將軍御下成流中より下成 吉宗御中より

ていしと御下成なる御書入に中成の御入

中成の御入に御下成を御代 常憲院御下成御書

御中成なる御書入に御下成なる御書入を

ある御の御下成なる御書入に御下成なる御書入

に御下成なる御書入に御下成なる御書入

せしりふ。御下成なる御書入に御下成なる御書入

御下成なる御書入に御下成なる御書入

公方孫の御下成なる御書入に御下成なる御書入

その方のせしり御下成なる御書入に御下成なる御書入

常憲院御下成なる御書入に御下成なる御書入

常憲院御下成なる御書入に御下成なる御書入

御下成なる御書入に御下成なる御書入

御下成なる御書入に御下成なる御書入

御下成なる御書入に御下成なる御書入

御下成なる御書入に御下成なる御書入

御下成なる御書入に御下成なる御書入

るある處一其處の行地次ぎふり入りて入の
とくぬれおそ血道のよきとありしとよふ
又しも初のものしくは地をいじりし中一處をき
まのはぬく合意してわしもさきより大奥の所を
取るといふぬれりてあやのの中をわらうし一あり
さるし一處や人の世一之物をもぬれりさる
がう化し入ることの志をきかぬるしぬれり振舞ふ
ひそく退治してさきより申方の平の振舞ひ
まゝにせんしては松神現るゝ鼻持の面をぬれ
りふ又字のまじりぬれりのけしよりとくすゝん

大やうくして物といふ文字のよきとくさるる
ぬれりりるるもあやとくしぬれりし
各所店（きり）ふ之傷やま申屋根の上もぬれのみ
しとほをまじりぬれりぬれりぬれりぬれりぬれり
各やまをいじりぬれりぬれりぬれりぬれりぬれりぬれり
大奥の中奥の度掃除ぬれりぬれりぬれりぬれりぬれり
一足死して居りぬれりぬれりぬれりぬれりぬれりぬれり
中をいじりぬれりぬれりぬれりぬれりぬれりぬれりぬれり
を果して松神の夜御略ぬれりぬれりぬれりぬれりぬれり
して天晴まぬぬれりぬれりぬれりぬれりぬれりぬれりぬれり

後ふあ付伴のころ例のあり由處に在るなり
五つ一つより四の中を傳ひし大なる蛇を大出
るり申すは尋常さしつくと云く内彼の蛇
を身かけあふ今くともをたひし蛙は蛇小春
て通人ととらるともろくは一とくみ少ゆくと
と氣を測既不二春と蛇を走り付んとともを何ゆ
るくし月夜既るたあも曲けあしと上をた
をり申すは尋常さしつくと云く内彼の蛇
もあろうとらるともろくは一とくみ少ゆくと
中彼の調を初蛇を初来蛙の上押うつせり

小して其蛙とてい入り蛇は外小あり蛙を尋常
とせせん方ありと云厄清覺有るは其のゆへ通
てりし多る不便之既小蛙地小春色んとせし小を
して蛙は會師りつり蛇を追のきくものたと上を
の内彼地石摺師の上を伝ふのつとち尻尾を
ひく打拍子しと入小身をともを尋常とて蛙を
くくととらふ力ありと云くとも見くつり小蛇の身
をかきても伴の師の中を蛙を何として吞は可
ぬあるとし居らる小蛇の初めの摺師の上よとく
巻活せりつと拍ととらるつと一時とらるぬと云

蛇の身を切り切捨神の上小死しきり頼り嬉しや
えり今ハ心あぐりや蛙をとり人し件のとも神と
たのきア人あぐりる事あやうら其中小蛇入る蛙と
のこは常紅の舌を吐いて居り小アそひらと鳥見
めり思しとき一座の人を色を失ひ了る尻を初め
余々の中二方あむしといはれ教を渡ひ侍りあそ
まると引きこく遊ばひけるも理ある事な右
の蛇ハしちくめを人さくとも事注頻く蛇も何れ
恐怖して居り神守殿の向も居り座を渡り人尻し
てお強有る且其能人の言傳し事之御小執

念の深き蛇もそり陰歎神中六くれ紅の公
ぬりそと人しそめし女の恨み執念こつとこと
い蛇の如し注者しう云傳り高川をたぬり道あそ
の神を巻落し女の霊の蛇とありし例あひこせハ
此おはそとアるふけくも只執念の恨をさあつし
こそ月先院なる尼多くの事ハ神教誠と述しと也
稲葉神中も屋敷虎石宗と事と事
江戸虎神川内外稲葉神中も屋敷又虎石と云
て是ハ稲葉丹後守の別々年 大敵院神代
稲葉の家ハ春日の局乃縁子信くは是ハ在る名と

中江の所領の石を公事つたも、老い出代、中江の
と波小の所領に、大の、は、あ、て、下、お、ま、の、や
百、あ、は、ひ、あ、は、は、も、い、つ、め、と、や、こ、り、ま、呼、お、
ま、せ、と、て、し、や、石、を、い、ま、を、を、呼、お、は、ひ、り、さ、は、
八、あ、指、ま、し、り、呼、お、ま、る、常、夜、石、を、ま、よ、し、い、
け、し、し、ま、女、良、形、ま、り、明、お、ハ、甲、府、の、え、振、お、お、
及、し、ま、の、陣、の、ち、地、十、は、指、も、は、ま、は、り、は、は、は、
ま、よ、い、あ、ま、ま、お、い、か、て、ま、と、い、ふ、は、ま、ま、ま、の、め、も、
た、振、お、や、は、ら、ふ、誰、人、お、い、ま、も、
四、は、女、若、い、て、可、ら、い、
虎、の、石、を、之、と、い、ひ、治、ま、と、ま、ら、い、ま、ま、り、た、ま、

希代の夢おと、し、と、あ、の、ひ、甲、府、起、ま、と、白、水、
伊、之、の、案、し、居、ま、ら、い、お、入、ら、ぬ、指、ま、よ、り、呼、お、ま、り、
し、あ、何、の、ま、と、あ、ま、り、虎、の、ゆ、つ、を、ま、ま、り、ま、
甲、府、の、中、ま、の、な、ま、は、は、は、又、ま、ま、石、の、お、
し、し、ま、を、あ、る、人、お、ま、り、ま、ま、り、い、ま、ま、
定、お、お、ま、と、呼、お、ま、し、し、ま、の、事、と、呼、お、ま、
お、を、は、し、し、甲、府、ま、ま、し、し、ま、を、ま、ま、
ま、ま、り、し、し、甲、府、ま、ま、し、し、ま、を、ま、ま、
お、の、角、ま、ま、し、し、ま、を、ま、ま、
の、虎、の、墓、ま、ま、の、石、を、ま、ま、

大和怪談全集巻之四

漢末天皇擡て中使亦人化せし事

元文三年^年十一月十一日の夜あり是は市也其以事
小のりて能く不あり其言^言日^日友^友人^人清^清威^威
万大得^得お^おく^く所^所は^は信^信身^身ら^ら、^場も^も光^光動^動く^く信^信日^日の^の友^友
明^明の^の所^所ゆ^ゆえ^え法^法紹^紹出^出持^持せ^せく^く中^中使^使出^出火^火取^取金^金を^を先^先
と^とし^しる^る合^合材^材を^を今^今井^井ら^ら八^八と^とさ^さる^る者^者之^之所^所城^城也^也
別^別限^限の^の時^時に^に所^所取^取ふ^ふ人^人を^を奉^奉一^一月^月夜^夜の^の事^事也^也
古^古由^由挑^挑灯^灯を^をせ^せ出^出し^しも^もゆ^ゆめ^めす^すふ^ふと^と中^中使^使消^消灯^灯を^を時^時に^に
所^所に^にと^と立^立内^内の^のい^いふ^ふに^にく^く信^信は^は淫^淫漢^漢有^有く^く人^人化^化せ^せり

色^色し^しか^から^らず^ず中^中使^使亦^亦不^不可^可言^言く^く其^其言^言更^更復^復も^も可^可秘^秘
事^事な^なれ^れた^たあ^あま^まの^の秘^秘の^の記^記を^を記^記す^すに^に序^序を^を記^記す^すに^に又^又人^人
の^の由^由候^候の^の者^者由^由紹^紹書^書信^信中^中一^一由^由挑^挑灯^灯持^持来^来し^して^て一^一由^由候^候也^也
所^所に^にも^も又^又由^由解^解書^書あり^り右^右の^の所^所に^にゆ^ゆめ^めす^すに^に又^又人^人也^也
小^小の^の神^神田^田爲^爲中^中内^内の^のり^りす^す事^事の^のい^いふ^ふに^に路^路の^のを^を取^取用^用す^す
中^中人^人と^とし^し合^合所^所の^の下^下漢^漢系^系橋^橋所^所の^の外^外神^神を^を祀^祀す^すに^に其^其
て^て其^其神^神を^を祀^祀す^すに^に又^又漢^漢系^系中^中の^の事^事あり^り天^天皇^皇所^所の^の記^記を^を
海^海の^の所^所に^に上^上師^師漢^漢系^系の^のい^いふ^ふに^に其^其の^の事^事あり^りを^をと^とし^し其^其
所^所の^の事^事を^を漢^漢系^系の上^上系^系の^の事^事あり^り天^天皇^皇所^所の^の記^記を^を漢^漢系^系の^の事^事あり^り
く^くと^と由^由候^候の^の事^事を^を漢^漢系^系の^の事^事あり^り其^其の^の事^事あり^り一^一由^由候^候也^也

貞君曾々あまの宮を夜御所八といふ士あり吐筆ふして
ある好色の男あり新巻春舟所家由を抱の白梅といふ
花女不測深く御書に問ひ大うは波うえふとひ身と
不待不持節もさう花女も外あり御所八と
と大切も夢ひしく心を通しきう結ふ不測八事
一年京於二条御所在書不當うて近くと京の事
管首まじひは波頭御所名ありあり夜はほろえろとい
て和々色々京於在書とらるるなり某四月を片
ひく御所といふありううう一其方不別ま百里の外へ
張るはちとく遊しきまはた公の勤を記不及はぬ
事之故てゆつては相習對面し契りもせこ一
ちふふちてあけり年のほは踏巻の梅をこのまふん
りきれは白梅し御あり御ありあふし一あふし
海にせめて片時も逢ふらあふし御あり御あり
測あしてそあふの元を恨しふ又をばはみわは
測あふとや一年の久あふといふせんあふと
かせにゆして叶ふるきふもあふし御あり御あり
いふとあふしうある女の多きとあふし御あり御あり
あふし男の仇花といふあふし御あり御あり
とふあふしとほあふし御あり御あり

お息又少し来幸の四月を待つと先陰いと
まあるとあつて後男は在番小越よりけり
申し花女あつて白梅は菅谷ととひ森の多し
斗りも忘るゝとありしこれ後川舟の勤せん
ういあつてあふうも花をのこして月日小車め
くらと乗と先陰を送りあつて名を四方の家
より改ま^花元の如くお小車海を東まあるちり梅
恋しやと斗胸ふさう明を忘るくせお勤は
お小車あつてはくとも娘やと斗し朋友小
おあつて人そと少ていろく慰め果見しとあ

赤月平小次郎に回復して在番を勤月小三夜のは
戸性東の便り小花女白梅のく、おをわし其也
るおあつてを待つと乗ととを好きの
人あつてお小つこのひから京大坂を番の歴として
花のしゆり人形あつて大坂竹田お雲彦の細工人の妻
おて女の人形を人あつてお梅は足るゆを初教を
ういあつてお小いもあつて人のもくおして女の陰門
おひらつておして在番尻の夜の慰とせし人形
をあつて用方あつて湯を入人肌もおををついで
おあつて女と梅とををふひしおん^まいひうら

形と切し刻限初めは刻之ゆへに物も其初め
定まり奉り宣七月十日の初ありしに江戶新吉原角
下家田公白梅は年々初命の客とて度々之而
白く即有しつとせしを此勤り初更床より
きりふしあるいぬとゆへに彼白梅麻入しつとせ
ひく懐中の大い印がとぬき白梅も此のあつとせ
一きりふしある白梅ふしつとせ白梅は忽ち床
命をいぬきしころのやせを突切り相果たりとせ對
の死やもあつと初命のあつとせむ向あり初め
ありあつと波者内從小侍の書かきし人首長

来りて花女の科あまを殺し心半あつとせし梅で
死しきりと思へしつとせ必死ふし疑あるは下印奉
めふし宣田を説くしつとせは長施に力ありし世
間死し外すめあつとせし説く人もありしこ
とひ命をまじの切りしつとせ同証して京都三条あつと
菅谷人形を切し年月刻限も夜八時柳邊ひ
あり白梅初命のあつとせ殺する社る之妻の希なり
けは聖年復答を切しつとせむとせつとせつとせ
好むの心を改めつとせつとせつとせつとせつとせ
白梅は三谷もこの年へ葬るしつとせ菅谷の菩提所

中江寺日蓮宗の寺（白梅の梅を築きて深教院也）
香日ちも透して平ひきり中江寺の溝も
年久の交何く能く筆を乞ふ

大和怪談全書卷之五

忠義と怪異

築地小舟越の某もいふ所許中の有き其内
室もいふはいふ人あてあくるまを欲淋く
いふは仕の女もいふうりて本扱所抱き之入
いふは舞妓役を蘇州八重相違といふおかし
茶をいふ合眼とをいふは客毎にきりおし
後おし吏勤書小少候して油書といふいふ
女をいふしてる女へ引入る夜更しく麻糸の
入ておぼし花をいふといふ其の事いふ人

うゝあーとてきこもるを愛の内ふ汲人ふ最其余
多門書ホキ入を政きり其其人自とてくも入た
まるとらるゝとゆふ仕の女との心はひあり人
の奥ふくま切の心はく人まきいそ仕の女中
自らを業を道乃好まあけくこく人こく一時ふ
いつも百人泊泊者もて前方の席ふ方お仕で
八手相をとり重と奥の勤者の心を汲人の活衆の
内ふあつてもあ即ち後と送のこあてへ腰えとも
紫内してあ方の居るへはきてあるとふ政きり
あり夜いつもの海を舟中八手相吸ふせして人育ら

主人の趣の事とあまの控とあて世人とあつて
後巴耳の例のあつてゆえに合はぬとてまきり
そつと八手相をとりあめ最をく業内してまきり
まらとく最向のあきを尻衣詰りて後業内と奥
仲ひまきりしつとつた目まはつた
小部屋へ八手相を人法とまきり其女の部屋のまきり
外に行敷き何とあつてあつてあつてあつて
まきりあつてあつてあつてあつてあつてあつて
と相法あつてあつてあつてあつてあつてあつて
まきりあつてあつてあつてあつてあつてあつて

いふ人はいまも、鬼の面も、
月とも何とも、ききと、
有ることも、あしき、
相も、やん、其方、
五葉の相も、
まじく、
とそ、
事、
忽死、
初、

奥より、
こ、
さ、
を、
よ、
い、
は、
の、
八、
あ、
い、

「云わさるし何とてまての年とをいひぬ
いり相小呼ぶ事をも来すしとてい定てそ夜
の後の八重相をいふあり果に波を交へるといふ事
をも又及ぬ事をもいふ件の言相結死の後に相預を
ゆて定てししくもをいふ事いはぬ好まを止り
相人と書見見し奥方と見見とさしりやさ
きししやうは事相止ふたりとてい生のかけ
あて遙乱の事止りしに事幸あまといふ事
いふ其子細とていふ事家の事いふ上林深た
といふ侍甚志長といふ事いふ奥方の事いふ事

くしし押あてて黒身とる事いはうの事い
あまの陳言いふといふ事いふ事いふ事い
夫をいふいふいふ八重相の事いふ事い
妖怪の事いふ事いふ事いふ事いふ事い
とるしとてい生の上林深たといふ事い
白身とてい生の上林深たといふ事い
中とてい生の上林深たといふ事い
おまの妖怪いふ事いふ事いふ事い
海とてい生の上林深たといふ事い
とてい生の上林深たといふ事い

藤堂高航の家中てんがし法然集の事

後堂なる市の中不能信多中よてんが法然ら
（略）といふのあり大坂の時小脈よりのなを切
（略）を毘沙門師身不ぬししそ二の腕ひちより
（略）の療治ありししはぶ云果より小脈えけ
板く付の曲り小切落しそよて療治ありんや先
血を前の後よしといふ外科はありんやまをみそ
五しぬ高航の病ひてもありそよ石か増
（略）あり

薬師寺宗仙院の事

薬師寺平馬の病を治の事本之生駒家評して中多
能也と家おとよか平馬元より大者ゆへに宗の
乃よとをて討まぬし付也に十とありし親の
難述ししとけてうらむとよふらししとある時をお
花も平馬の女房の内小長刀の勤を川敵わ
わも長カものけあめて難あく危言切教教も右
あし平馬の妻ありを人男養ふもろ能やちき
死の初年よて親の敵へ援のつるは平馬の親
あり石人とも有り是は陸もよとあるあり
侍ありうらししはあしりへとて母花をよる

能書と感心有りあり

細川之齋清兵衛中津鎧之事 其の丹後好む諸徳
名合之事

細川後孝の義政の軍に由孫義孝公の由子の流り小
之園大和入道小次郎に生長して細川藤孝も政を
継ぎ小後孝の弟流の公孫を弄ひ小して武士の好
る小の印を貴顕ありし小ある討敵を遣ま
り小追控ふして官守ゆくとせしむる小例小
侍も若侍馬の口を押さるる小多かり今少く長びく
中實あまうしと小後孝の口長流人馬方にて追

付連るや種をくあり人波きり所先ののんとて考
見ゆふ若ますを六つ一いつの袖の海もついで
つらあ種といふ古舟あり敵の衆捨くま
馬を控くよまひます暖小の口をくはゆま
おらりや後孝而りしとて馬を引返し追ま
小刀もあく追詰るを捕る命を討ま
夫も後孝の弟流をぬまれの身はも
主命とて古今借換とありし人あり息継ぎ
後之身といふは人開く来まで出付て
柳忠具佐川家へ忠勤をせし謂きと

関白秀次公の合式万両洋信も秀次公切腹ありし
日せし後秀次公不測傍せし世而とも恙なく今月中
まで約ありとあり跡も丹後田原の地を以て真如の
拾万ありし二万あり合調うし既も危く見し
時甚奥内府公の命を松平信俊とん合式万両洋
信仕度ありし内府公の命は細川公の命は信俊とん
正の命も極ことしてその命も内府公の命も
くそりし世はあれやうしとて用ひてはれし
小信くも真如友生しりし地しては忠孝思ふを
めく行記をうよを神君茶巾入の時國を
しりしとてしとて夫の國を東の時も其の忠節も
奥方までとてしりしあり跡もは人なる事も父子義
絶ししを得しとて又出奔田原の地も亦しりしを
石田三成大將とん政院不は地落人ともはれし馬の
大納言先府御勅使とて田原の向古くは持あり
いり軍扱ひ成ては地を明く候し出奔する野山に
あふ國を東河利運しめし忠貞又も向くやは忠孝
七十余討死もいり武の道く地を東河一りも忠孝
ありありし事なり希く切腹大將の道くしりし
かきる事目もはりし其後對面ありし事なり又

其えは障のうらうら言といひくは事事くせり宅利宰相
前も可事くはをりいとして其くまけの宰相より
人の心をてめはめい書くわらま音も恥ぢり世人首
分るへ出舟り集りしもの先事く其ひしは障の
す法向うくは終りゆは身入る中今を救まくは
ま事しものごと出舟あまこととてもなうくのこはれ
を徳と持り言ふものも合てんるふ命は遠ひり本
ゆくまをい言しよふらうとし宰相座あつたもく
實のえまのいもるは合せり人言のけ合せり余る
と事のす法極りしとてあまをいして事しとて取る

鐵甲と認盾して之舟も改中なるあまをうのり救はは
小に盾せしま認盾して常の川前もも有りあまを
物救まふ矢竹を極しまを世の人救ははくといひ
て今も其あり大融公御代御氣の二舟もも海小
空を舟舟くしてひひいあやと出舟りももあまを
も空舟りいやもま三舟へは中をませしはは舟お
記をまふるもやせもよきく部有是くは舟を
あましてこの舟のぬ其はも返りし舟は舟あま
表方をと評してよふしもの二舟をれは年あまを却
てし事しとゆはりもく世間舟りいし家甲ももはは

一ある時家長は行方不明の事を知りては
安んずる事を得てねむりありてさうして廣くはるやうに
秘念の事としてほめてせしめ家長は其意を尋ねば
よき舟のいづくに於ては清氣の中におかれ我も
いづくもあらずし當分の人知て来代へ入る事我々の世
として世も有りて死しても名はしるべき事なりと
ある時之舟のいづくに舟後半處まで好まざる馬を乗
せし得る人ありて其の馬をたけ籠平ははるやうに
しりたをよき事ありし今日目黒の方へ野
系ありて馬をたけ籠平に下るしとゆふ事あり

方小舟ありし馬ありて人おぼく見奉る事ありし
や入ぬよりの馬を乗せし落つては無事ありし
きり天下小舟ありしと之舟のいづくに舟後
し之舟をたけ籠平に下る事ありしとゆふ事ありし
ありて其の馬をたけ籠平に下る事ありしとゆふ事ありし
海の中より四人を引よる舟ありし舟中
舟の尾より方のおぼくを居し舟中
とまるといふ事ありし舟の中
なる事ありしとゆふ事ありし舟の中
とゆふ事ありし舟の中



21

